

# 太 工 同 窓 会 報 第 6 号

昭和52年2月20日

群馬県立太田工業  
高等 学 校  
同 窓 会

## 同 窓 会 員 へ

同窓会会長 林 進一

太田工業高校同窓会会員の皆様御元気で御過しのことと思います。本校同窓会も着実にではあります。が前進しております。

今回は私が日頃から、こうしたい、こういう生き方をしたいと考えていることを書いてみたい。

一つは、広い視野、高い視野をもちたいということです。一歩一歩ふみしめながら山に登る。楽ではないけれど、それでも一歩登れば、一歩視野はひらける。一歩二歩十歩百歩と登れば、尾根の向こうにまた山があって、今まで一つの山のように見えていたが、実はいくつもの尾根にわかれていて、その間に谷があって清水が流れて、その清水がはるかもやにかすむ白い川につながる。今までの自分が小さく見えるほどの胸のすくむような視野である。登ってよかつたと思う。世の中が何となく落ち着きを失って、他人のことはさてお

き、自分のことだけで頭がいっぱいになっている現代は、大所高所に立ち広い視野高い視野を持ちたいと考えています。

次に、理想をもち生きていきたいと考えています。人がこの世に生きていくかぎり、やはり何かの理想を持ちたい。希望を持ちたい。それもできるだけ大きくできるだけ高く。志低ければ怠惰に流れる。最高、最大、最善、最良とにかく、最の字のつく理想を持ちたい。希望を持ちたい。そこから自他共に暮らしの高まりも生まれてくる。しかし、いかに最善・最高を目ざしても、一挙に何ごともしようは望めない。この世の中にはそれがゆるされない場合がしばしばあるのである。それを押せば無理が起る。悩みが起る。そこで次善の策ということがある。次善だからというで軽んじてはいけない。次善は最善に達する一つの大切な道程なのである。

## 新任のあいさつ

学校長 徳江 浩

同窓会会員諸兄には、平素陰に陽に母校発展のため心を掛けてくださり、感謝の言葉もありません。昨年四月就任以来、あわたたしく一年を過ごしてしまい、諸兄にしたいとお会いしてお礼申しあげる機会もなく、恐縮しています。紙上をもって厚くお礼申しあげますとともに、心からおわびいたします。

本校も、今年三月一日をもって、卒業生三八八五名を教えることになりましたが、創立以来十五年という若木ながら、堅く、強く、たくましい年輪を重ね、いまやあらゆる面において、伝統校をしのぐ確固とした基盤のできたことを確信いたします。

さいわい本校は、地域の産業にめぐまれ、今年度卒業予定者の就職もすべて早期に決定し、進学予定者についても、順調に希望がかなえられつつあります。これもひとえに、卒業生各位の築かれた良き伝統と、高く評価されつつある諸兄の尊い実績のおかげと深く敬意を表する次第であります。スポーツの面においては、本校

生徒の活躍に対して、おそらく諸兄は「いま一歩」という不満の感想をもっておいでと思えますが是非近い将来に期待してください。きびしく、たゆまぬトレーニング、可能性に挑戦しつづける気力、これによって鍛え抜かれた肉体と闘志こそが、若者の命であること。今年は今生徒に訴えつづけてゆきたいと思えます。

近江聖人と呼ばれた中江藤樹は、「真の教化は徳教なり、口にては教えずして、人のおのずから変化するを徳教」と教えております。

私も母校職員が、それぞれに自ら修養し、自ら実践し、全校生徒が黙々としてそれぞれの持てる力の限界に挑戦する気力を充実させたとき、太工の伝統にまた一条の強い年輪が加わるものと信じ、学校をあげて努力してゆきたいと思えます。

『雄飛の若葉茂り合』という校歌そのまゝに、諸兄がいっそうのご活躍と発展をいたされまますよう期待し、ますますのご健勝を心から祈っております。

### 第五回 工業祭

教務主任 後 藤 友 蔵

昭和三十一年秋に第一回工業祭が開かれてから、もう十二年。

第五回工業祭は、四十九年入学生（三年）五十年入学生（二年）五十一年入学生（一年）の諸君によって、昨年の十月三十日（土）三十一日（日）の両日に盛大に開催された。

今回は、生徒自身にこの大きな行事を積極的に取組ませ成功させて、今後の生徒の学校生活を、一層に活動的なものにさせてゆくことを目標にした。

この目標にそって、生徒会実行委員会がテーマを決めたが、生徒会長家中菊治君は、次のように語っていた。

テーマ 『打破れ、日常の惰性を』

「決まった時間に決まった道を通って、家と学校を往復するだけ。これが私達の生活です。そんな中で、今日は本当に良かったと思う日はたして幾日あるでしょう。目的もなくあれあいで過す生活に慣れ切っています。」

工業祭という大きな行事を機にして、日常の惰性を打破って、一

層に充実した生活をとりもどしたい。」

文芸部等では夏季休暇中に準備を始めたといっていたが、実行委員会が組織的に活動を始めたのは九月になってであった。

総務

渉外、受付接待、保健衛生、警備、食堂、放送

会計

工業科

機械、電気、工業化学

全日制生徒会

資材、広報、後夜祭、アーチ、招待試合、映画、クラス展示、クラブ展示、委員会展示

定時制生徒会

右のような組織の上に、生徒会実行委員会が編成されて、各組織から提出された予算請求を基に予算案をこの委員会で作製し、職員会議に提案承認された。予算総額は一一六万余。

十月二十五日（月）の午後から全校あげて準備に入った。

十月三十日（土）三十一日（日）の工業祭の日は、ともに晴天。

三十日午前中、近隣中学校の進

路指導担当教諭に集合をお願いして、入学説明会の後に工業祭を見学していただいた。見学者数は両日で三三八五名。同窓生諸兄に催物名を紹介しすから、それぞれで開催した頃の工業祭を思い出して下さい。

工業科

従来の実習棟の北側に、新実習棟が四十九年秋に完成し、各科の実習設備は非常に充実したので、まず各科の実習室名を紹介します。

機械科

製図室、流体機械室、鍛造室、電気室、熱機関室、板金工作、精密工作、材料試験室、工業計測室、機械実習室、仕上組立室

電気科

電気機器室、電気工事室、電気工作機械工作、電気応用室、自動制御室、電力室、電気計測室、電子工学室、電算機室

工業化学科

化学分析室、天びん室、工業試験室、物理化学室、製造化学室、機器分析室、化学工学室、製造プラント室、製図室

こうした実習室を利用して、平素の実験実習の内容を見ていたのだが、例えば、機械科の歯車研削盤やねじ転造盤の作業、蒸気原動機実験、電気科の電算機実習や

旋盤作業、工業化学科の製造プラントによる界面活性剤や水性ワックスの製造等を古い年次の諸兄が見られたら、どう思われるか。

●全日制生徒会

展示

写真、地歴、文芸、囲碁、計算尺、無線、ユース、映研、山岳演奏

ブラバン、ギター同好会

招待試合

野球、柔道、テニス、サッカー、ラグビー

●必修クラブ

映画、落研、レコード鑑賞

委員会

編集委、図書委、保健委

●二年生修学旅行写真展

●クラス展示等

一 M A B、三 M A、二 E B、三 M A B、三 B A B、三 C B

●定時制生徒会

職場、詩集、美術、学芸、写真

鉄細工

五回にわたった工業祭を内部から見る時に、世代の交わりを一番に感じます。新旧の会員間で話しあ

う時等、諸兄も同様だろうと思う。然し、この違いは互にのりこえる

ことが大切です。諸兄も公私それぞれの場合、世代の違いをのりこ

えて協力し活躍して下下さい。

### 最近の進路状況

進路指導主事 鈴木 敏一

石油の海の中に浮んでいるように日本の産業構造の現状で、3年前の世界を襲った石油値上げ旋風は文字通りのショックであった。

昭和四十八年十月六日、中東戦争がぼつ発し、二日後の十月八日OPPCが石油の八十%引上げ、三週間後に価格を二倍にして同年末までに一挙に四倍に達した。

街では、砂糖が商店から姿を消し、トイレットペーパーの行列買などの例は末だに記憶に新しい。当時私は教科書の係をしていたが、発売の直前まで値段がわからず、やっと手にした本には定価がはりつけてあり、その下の印刷と違っていたのを今でも忘れない。

これだけの激変は今までに例はなく、操業率の低下、在庫増など近くで自動車の野積みなど異様な光景であった。企業の体質改善、合理化の徹底など結局新しい価格体形への移行であり、従来の不況と全く異ったパターンであって、在校生の就職についても心配されたが、幸い本校では近隣の会社で輸出好調の家電、自動車にさええられた回復基調で前年度とそれ程

の落ち込みもなく、むしろ順調に進行した。

次に本年の状況の概略を記すと

一 求人状況  
○ 求人数は約六百五十社で昨年度とほぼ同じである（これは高度成長期の約1/2である。）

○ 大企業からの求人は縮少気味。ここ十年間ぐらゐ増産につぐ増産で、内部での人員構成の見直しや傾斜生産の是正。

○ 二次採用を行なう企業が少なくなつた。

○ 科の指定が全体的に少なくなつたようである。

○ 中小企業の求人は比較的活発であり、従来の手不足の解消と高年令化の改善に意欲的。

○ 職種への選択の巾が少なくなつた。

○ 求人数は就職希望者数の約六倍

二 生徒の志望状況

○ 卒業生総数 二四五名

○ 就職希望者数 一七七名

うち 学校幹旋 一六二名

自 営 七名

緑故就職 八名

進学希望者数 六八名

うち 四年制大学 四六名

短大・高専 二名

各種学校 二〇名

○ 就職希望者は全体の七十二%で進学希望者は四年制大学十九%。

各種学校は八%である。

三 進路の決定状況  
○ 就職内定者は希望者の九十八%でこれは前年に比し順調である。

○ 未定者は一部民間企業と公務員関係の発表待ちである。

○ 学校幹旋者一六二名について、県内就職は一二一名で七五%であり、県外でも近県のため通勤可能者を含めると八〇%に達する。

○ 進学関係では今度初めて国立高専の四年編入試験が実施され、本校では、群馬高専と小山高専に各一人ずつ合格した。また私大の推薦入学が開始され、現在合格者は九名である。

最近の特徴として志願率が上昇してなかなか難しい傾向であり推薦の希望が増加している。希望学部は非常に広範囲になった。

四 その他

○ 公務員関係の希望者が増加し、競争率がきびしくなった。（警察官、市役所、消防署、国鉄、目衛隊曹候補、農協等）

○ 電々公社の特別採用のワクが廃止された。

○ 大企業は各地の工場毎の採用であるので、地域限定という面が強く影響している。このため地元採用優先の傾向である。

### 機械科を語る

機械科長 高橋 欣弥

本校機械科は、初年度後藤（現教務主任）、木村（現定時制教頭）中里の各先生の担当によって始まりその当時は、機械実習室一棟だけで設備も旋盤10台とボール盤及び手仕上の万力などわずかの機械や設備で完全に機械科の実習項目を身につけるにはこと欠く状態であったが、その閑散とした実習室の中でバイオニア精神に燃えている職員・生徒が真剣に実習に取り組んでいる姿が印象的であった。

その後職員の数も、施設・設備も年々ふえ、三年目で十一名の職員がそろい機械科の基礎も固ったが、以来今年度で満十五年となり機械科卒業生も千有余名を送り出し、社会の各分野において活躍してくれている。

その間に、職員の移動も多少あって昭41狩野先生は前工へ、昭42木村先生は定時制機械科へ、昭45氏家先生は故郷の岩手に戻り現在は水沢工に、昭48檜原先生は在任中病に倒れて死去され、金井先生は今年度桐工に転任された。

なお、施設・設備もますます充実され、施設は現在では、鉄骨平

家建の実習棟二棟の北側に昭和48年度建設されたすばらしい鉄筋二階建の実習棟が完成しており、機械科では板金・溶接、精密工作、仕上組立の実習室があってその一階の東端に科務室がある。

さらに、設備も昭和48年度施設の完成と共に大幅に充実され他校にも見られないような設備も整い、県下工業高校の中でも屈指の施設・設備を誇れる状態になっている。そして、その恵まれた環境の中で後輩の生徒達は先輩の残した立派な足跡をたどりながら明日の技術者を目指して頑張っている。

現在の機械科の職員構成は次のとおりである。

- 高橋 欣弥 (科 長)
- 後藤 友蔵 (教務主任)
- 毛呂 実 (昭48伊工より転任)
- 茂木 英一
- 菊地 貞雄
- 伴場 茂
- 齊藤 芳国 (昭51桐工より転任)
- 菊地 丞示
- 中島 勇作
- 中里 昌明
- 須永 章久

電気科長 新井 磯男

科の特色としては、基礎的かつ全般的な実験実習の施設設備のほか、自動制御やコンピュータの設備もあり、日進月歩の科学技術に即応できるよう技術の習得をめざしています。特に今年度行なわれた工業祭では、電気計測、自動制御、電子工学関係の応用面の各種だし物は最近の科学の進歩に即応したものが数多く実演され多くの参観者の人気の的になりました。科の指導目標としては、実験実習を主体として実務能力を習得させ将来電気技術者として社会に貢献できる人材を養成するよう努力している。又希望と生きがいを感じる高校生活を送れるよう一年生では計算尺三級を、三年生で二級一級の資格を、二年生全員に電気工事士免状(合格率 五〇年度 九四% 五一年度 八五%)、三年生で高圧電気工事士及び電験三種の免許を取得できるよう指導しています。

電気科も第一回入学式を昭和三七年四月七日に二学級一〇四名の入学者を迎えて発足いたしました。現在では二学級八〇名となっております。昭和五一年三月末で二、三〇名の卒業生を社会に送り中堅技術

者として多方面にわたって活躍しています。本科卒業生の主な進路について説明致します。

富士重工	4	3
東京三洋	6	6
東京電力	1	1
沢藤電機	2	2
富士通	1	1
国 鉄	1	1
明星電気	1	2
松下電器	1	1
王子製鉄	1	1
電々公社	2	0
岡本理研	2	0
日本電子機器	0	2
日本ビクター	0	1
日産ディーゼル	0	1
三菱電機	2	0
三菱電機	2	0
三ツ葉電機	2	0
ハウス食品	1	0
東武鉄道	2	0
新日鉄	1	0
帝都高速営団	0	0
三愛工業	0	1
協進製作所	1	2
日東電機	0	2
松本精器	0	3
曙ブレーキ	2	1
進学者	0	0
(希望者)	25	26

工業化学科長 栗野 昭  
卒業後各方面に活躍の工業化学科卒業生の皆さんお元気ですか。自動車・電機産業はいちはやく、不況から脱出のきざしを見せました。化学工業はまだまだ低迷しています。先輩諸氏の会社等の景気はいかがですか。大分きびしい現状だと思っています。

時の流れは早いもので本校も開校十五周年を迎えておかげ様で、工業化学科の卒業生も千有余名になりほとんど大部分がこの地元産業に従事しています。

化学工業が幾多の加工工業の、原材料を供給する基幹産業であることは誰でも周知の事であり、また、化学の知識・技術が種々の産業に必要であることも多くの方々が述べられている所であり、この地域の産業構造によるものか、あるいは地域社会の示す風潮によるものか、未だに本校の工業化学科を第一志望として入学するものが一・二割の現状であります。

この様な現状でありますから、学校としても、工業化学科としても種々のPRに努めて参りましたがなかなか効果が現れない現状であります。

ここで先輩諸氏にぜひお願い申

し上げたいことは、工業化学科を第一志望として入学する生徒が、一人でも多くなるよう各一人一人がわずかの努力をしていただきたいと思っています。

今年の就職はおかげ様で順調に全員が内定いたしました。

皆さんの後輩としてふさわしいよい卒業生がこの四月に各会社に希望に胸ふくらませて入社して参りますのでよろしくご指導をお願い申し上げます。

二年前に新しい実習工場が建設されプラント実習室、製図室、化学工学実習室と明るい科務室（工業化学科の職員室）が出来ましたので一度お立寄り下さい。

先生方の異動は次の通りですがその他の先生方は皆元気で活躍しています。

- 岩谷 正一先生（四三年三月転出）
- 塚越正次郎先生（四三年四月転入）
- 安井 進先生（四二年三月転出）
- 飯島 博志先生（四二年四月転入）
- 高橋 洋一先生（四五年四月転入）
- 伊藤 辰男先生（四八年四月転入）

終りにになりましたが皆様のご健康をお祈りします。

### 魅力ある充実した学校づくり

定時制教頭 木村 允

創立十五周年記念の行事である工業祭も無事に終了したその翌日、反省会の準備ができたという連絡を受けて、四年生の教室に赴いた私は、そこに待機している定時制生徒全員の明るい表情と、和やかなふん囲気に思わず笑みを浮かべながら指定された席についた。

やがて開かれた反省会で生徒達は高らかに「定時制の歌」「人を恋うる歌」をうたった後、一人一人中央に出て工業祭展示物を手にしながら説明を始めた。

山野に咲く花を鉄材で作ったグループは、その花の特徴や、製作過程における苦心を、絵画・写真班は赤城青年の家での関東地区定時制高校生グループリーダー研修会や修学旅行、宿泊研修会、クラブ活動での作品を、文芸班は詩集「定時制の詩」の内容やそれに寄せられた外部の人からの声を、又職場や学校の紹介を担当した者は職場の製品、仕事の内容、アンケート結果についてのべていた。

以前は欠席、遅刻、退学者が多く諸行事への参加も芳しくない状況であり、対策に苦慮したものが、本年は未だ一人の脱落者もなく、

又全員が出席して行われている反省会の席で、誰もが生き生きとしかも懸命に発表しており、更には、その労をお互いにねぎらい合う様子を見て、深い感動と喜びに浸っていた私は、時のたつのを全く忘れていたのである。私見ではあるが、現在の学校教育において最も大切な事は、生徒一人一人の資質の向上をはかり、やる気を起させることである。定時制生徒の

毎日勤労と学習の二重負担の連続であり、又、職場、家庭において様々な問題をかかえている者が多い。本来ならば、このような生徒達こそ最善の就学条件を与えらるべき職場、学校、社会の現実を決して恵まれたものとはいえない。更には全日制高校への進学率の上昇に起因する生徒の減少は、この課程の教育を一層困難にしている。

この様な中に在っては、諸行事、日常の教育活動を通じて生徒との心の交流をはかり、一人一人の意欲を高めさせることが、やがては生徒集団のまとまりに、更には魅力ある充実した学校づくりにつながるものと確信し、全職員一体となって、その実現のため努めている次第である。働きの道に励む定時制生徒のため、関係各位のご協力を切望して止まない。

### 会員だより

- 計報（五〇・九一五一・一二）
- 栗原芳夫（九期M）
  - 松沢文夫（四期C）
  - 高山三男（九期M）
  - 平田 博（三期M）
  - 見内 修（二期C）

同窓会では、既に二十九名の方々が永眠されました。謹んでおくりやみ申し上げます。

### 学校だより

- 職員移動 昭和五十一年四月
- 青山良平先生（校長）伊工校長へ
  - 金井恵三（機械）桐工高へ
  - 川島泰一（国語）新高退職
  - 桑子秀雄（事務）新高教頭へ
  - 小林陽子（事務）退職
  - 坂牧英治（事務）新田高へ
  - 町田肇勝（電気）教育センター
  - 渡辺 実（定体）館林高へ
  - 阿部光雄（理科）武尊高より
  - 石関繁雄（事務）桐女高より
  - 小淵輝明（国語）新田高より
  - 柿沼美代子（事務）大女高より
  - 齊藤芳国（機械）桐工高より
  - 清水国稔（電気）伊工高より
  - 徳江 浩（校長）伊工高より
  - 半田昭彦（定体）新任

川島泰一先生は、昭和十一年よりの教員生活をおえて、定年退職されました。御健康を祈ります。

# 太工高最古参

事務長 中村 勇司

月日の経つは早いものである。光陰矢の如くと云うが文明の世の中になつたせい最近は特に早いように感ぜられる昨今である。

紅顔のあどけない少年だった本校の一期生も早三十才の壮年になり妻をめぐり又父親にもなった。私も四十才で赴任しいつの間にか勤務年数でも年令でも一番古参になつてしまった。まだやらなければならぬことが山積しているが然しここ三三年の財政もきびしく大変なもので学校の設備も思

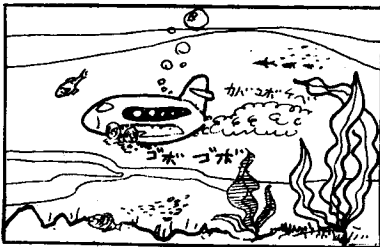
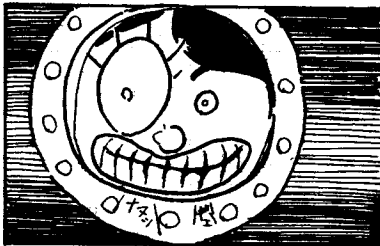
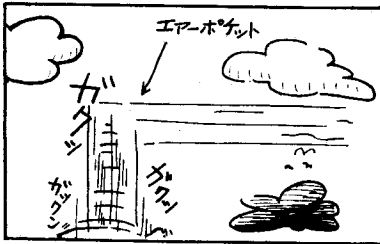
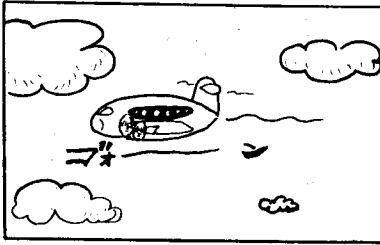
うようにならない。創立二十周年が間近だと云うのに図書館の増築整備、視聴覚教室の新築又ブルーの建設、運動場の拡張と全く枚挙に限りがない。残り少ない在職期間ではあるが精一ばい校長先生を中心とする職員組織の一員としてお手伝いしこれ等の諸設備が完成することを願っている。同窓生の諸君も是非この事案が一日も早く着工できるよう後援賜り度いと願っている。

本校開校の産声が太田市鳥山の金山高等学校跡で始まり生徒も職員も一致協力して学校造りに精進していた様子が今しみじみと脳裏に浮び上ってくる。生徒指導を始めとする厳しい教育にうち勝って社会に巣立って現在早十有余年を経たそれぞれの分野で活躍しておられる様子を見たり聞いたり致し中堅の存在となられた事は本当に当時の教育でよかつたと思つて思ひよるこびがこみ上げてくる。時代の流れは年々日々変り私達大正生れの古参組には随分と理解に苦しむものである。新しいものには新しいもの何かのよさがあるのと同時に古いものにも必ずよいものがあるはずである。古いものから新しいものを見出し創造することが大切であると思ふ。

昔殿様が灰の繩を献上せよと家臣に命じたそうである。家臣はいくら研究してもどうしても造ることが出来なかつたそうである。出来るはずがありません。そこで経験を積んだある老人に教えをこらたそうである。老人は繩を皿にのせそれを焼けば灰の繩が出来ると教えてくれたそうである。家臣は教えに従つて造り殿様に献上し大変喜ばれ重い役職に登用されたそうである。これは全く経験から生れた新しい創造である。文明の現代社会においても必ずこの様な事項はたくさんあると思ふ。

## エアーポケット

10EA 田中 未男



### 編集後記

当太田工業高校もこの三月で三期生が、社会へ旅立とうとしています。この同窓会報もやと第六号発行の運びとなりましたが、関係各位の皆様方の御協力に感謝の気持ちでいっぱいです。そして、又、先輩各位の皆様方の後輩諸君への暖い御指導を心よりお願いいたします。

(関記)